

〈研究論文〉

# 幼稚園教員養成課程「身体表現」の模擬授業が 幼稚園教育要領の理解度に与える影響

菅 家 沙 由 梨<sup>1)</sup>、西 田 希<sup>2)</sup>、雪 吹 誠<sup>3)</sup>

(<sup>1)</sup> 短期大学部生活科学科、<sup>2)</sup> 人間学部子ども学科、<sup>3)</sup> 人間学部児童教育学科)

## Influence of Kindergarten Teacher Training Course "Body Expression" Simulated Lesson on Understanding of Kindergarten Education Procedure

Sayuri KANKE<sup>1)</sup>, Nozomi NISHIDA<sup>2)</sup>, Makoto IBUKI<sup>3)</sup>

(<sup>1)</sup> Department of Living Science, Mejiro University College

<sup>2)</sup> Department of Child Studies, Faculty of Human Sciences

<sup>3)</sup> Department of Childhood Education and Welfare, Faculty of Human Sciences)

本研究は、模擬授業の実践が幼稚園教育要領領域「表現」の理解度に与える影響について、模擬授業実施前後の自己評価から比較検討した。対象は、東京都内私立大学に所属する幼稚園教員免許取得希望者である学生で、教職科目「幼稚園教育法（身体表現）」の受講者124名とし、「幼稚園教育要領」および「幼児に自信をもって指導できるか」についてのアンケート調査を行った。調査の結果、全ての質問項目において実施後の理解度および自信度が有意に高い結果となり、模擬授業の実施は、学生の幼稚園教育要領の理解度に影響を与えること、また幼児指導に対しての自信に繋がることが示唆された。これらのことから、模擬授業実施前に幼稚園教育要領の内容理解を深めることで、模擬授業に対する課題が明確化される可能性がある。

キーワード：幼稚園教育法、幼稚園教育要領、身体表現、幼稚園教員養成課程、模擬授業

### 1. 諸 言

「あそび」は子どもたちにとって生活の中心であり、体を動かしてあそぶことで様々なことを学び、体得している。友達とあそぶことで自他の関係理解や仲間との競争や協力・共同といった社会性も学び、情緒面での体験や知的な発見もある（池田, 2015）。また、あそびは子どもの心身の調和のとれた発達の基礎を養う重要な学習の場である（高橋ら, 2015）とも言われており、子どもにとってあそびは、その後の人生の土台を形成する貴重な経験だといえる。したがって保育者は、発達の特性に応じたあそびを提供し援助することを求められている。

その中で「幼稚園教育要領」では、生きる力を育

むことをねらいとして、指導領域の一つとして「表現」を掲げている。この領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを内容としている（文部科学省, 2008）。かつて身体表現は、保育の領域で「遊戯」と称され、歌や音楽に合わせて振りを付ける内容が主であった（岡田ら, 1997）。それが1989年の幼稚園教育要領改訂により身体表現遊びとして「保育内容（表現）」の中に盛り込まれ、以後、身体表現は、子どもが感じたり考えたりしたことを、思いのまま自由にのびのびと身体の動きで表す内容となった。しかし、このような内容の身体表現活動が保育現場で実践されていないのが現状となっている

(高原ら, 2017)。永井 (2011) の幼児の表現活動に関する事例報告によると、幼児期に求められる表現活動の援助指導とは、発表会に向けて作品を完成させることや上手に発表できることではなく、子どもたちがその後の人生の中でより豊かに自分自身を表現する力を育てることであると述べられている。これらの先行研究より、旧教育指導要領の歌や音楽に合わせて振りを付ける内容が主であった時の流れがまだ残っていると考えられる。このように保育現場における領域「表現」に対する理解は、必ずしも幼稚園教育要領のねらいに沿ったものではなく、作品を完成させることに焦点が向けられやすいことが現状にある。子どもたちの未来を見据えて援助していく保育者は、幼児期に必要な「表現」活動に対する理解を深めていかなければならない。そのためにも幼稚園教育要領領域「表現」の内容について、より一層理解が必要となってくる。

近年、幼稚園教員養成校においては、教員養成課程の質的な充実を目指す授業科目として模擬授業の実践が行われている。模擬授業の実践は、学生のスキルアップをはかるとともに実習前に自分の取り組むべき課題に気付くきっかけを担っている(清, 2013)。先行研究においても、模擬授業を行ってから学外実習を行うことで、自らの保育の考え方を見直す作業を促していることが明らかとなった(松山, 2010)ことや、学生は模擬授業の中で、保育者役と子ども役の役割を体験することによって、様々な心情を体験し、客観的に自分の保育を見る視点を広げている(阿部, 2016)ことなどの報告がある。清 (2013) による模擬授業演習の立案とその教育効果の研究においても、模擬授業演習を通して、「学生の学び合い」・「自分の保育の見直しと課題の発見」・「保育・教育実習へ向けての動機づけ」の役割を担ったと報告している。このように模擬授業を通しての学生の学びやその効果、さらに今後の課題について、数多くの研究・報告がなされている。

そのような報告の中で、高橋ら (2015) の研究によると、模擬授業実践を通して、具体的な問題点や改善点は、「展開方法」、「言葉かけ」、「時間」に対して課題意識が高いが、「最後のまとめ」、「あそびのねらい」に関しては課題意識が低いことが報告され、「まとめ」や「ねらい」の理解については、学

生の不足している指導スキル要因であることが考えられている。また、菅家ら (2018) による幼稚園教員養成課程の学生における身体表現指導の理解度についての調査結果においても、自身の模擬授業に自信をもって指導できる学生を増やしていくためには、実践内容だけではなく、幼稚園教育要領の示された内容の理解度をあげていくことが重要であると述べられている。ゆえに、幼児指導で求められている指導内容にしていくためにも各領域のねらいおよび内容の理解について理解度をあげていくことが重要となってくる。

今後の幼稚園教育法(身体表現)の授業内容の課題として、教職課程の授業においては、学生に指導実践を行う上での留意点を理解させるのはもちろんのこと、さらには、教職課程で共通的に修得すべき資質能力となっている教職課程コアカリキュラムの定める内容を学生に修得させ、幼児の発達や学びの過程を理解した上で授業内容を考えていくことが重要である(菅家ら, 2018)。教職課程コアカリキュラムの内容においても「幼稚園教育要領に示された教育の基本を踏まえ、各領域のねらい及び内容を理解する(文部科学省, 2017)」ことが目標とされていることから、幼稚園教員養成課程の学生に幼稚園教育要領の内容を理解させていく必要がある。幼稚園教員養成課程においては、幼児期の健全な心と体を育てるために、これまでに増して幼児期の運動遊びや表現遊びの重要性を理解し、幼稚園教育要領に準じた適切な指導ができる教員を育成することが求められている。

そこで本研究では、幼稚園教育法(身体表現)の授業において模擬授業を実施した学生を対象に、幼稚園教育要領の理解度に関するアンケート調査を行った。今回は幼稚園教育要領の中でも領域「表現」の身体表現に着目し、幼稚園教員養成課程の学生は幼稚園教育要領領域「表現」についてどの程度理解を得ているのかを、模擬授業実施前と実施後の自己評価から理解度の差を比較検討し、今後の幼稚園教員養成のための授業研究を目的とした。

## 2. 方 法

### (1) 調査対象及び調査期間

東京都内私立大学に所属する幼稚園教員免許取得希望者である学生で、教職科目の「幼稚園教育法（身体表現）」を受講し、研究の同意が得られた124名を対象とした。調査は2018年5月から7月に実施した。模擬授業は1人1回ずつ行い、アンケート調査は全15回の授業回数のうち、模擬授業実施前の第5回目（5月）と実施後の第15回目（7月）に実施した。

### (2) 調査内容・分析方法

対象者には、研究者にて作成した自己記入式質問紙調査を実施した。質問内容は、幼稚園教育法（身体表現）の授業で行う模擬授業実施前後において、幼稚園教育要領領域「表現」の内容をどれだけ理解しているのかを調査した。

幼稚園教育要領領域「表現」の内容の理解度においては、幼稚園教育要領の内容を参考に「ねらい、内容の理解」、「表現を楽しむことへの意識」、「子どもたちへの指導の工夫」、「表現の工夫」の内容を質問項目として作成した。さらに、「現時点で幼児に自信をもって指導できるか」においても模擬授業実施前後の質問項目とした。また各質問項目において、その回答をした理由や、学生自身がどのような意識を持ち、指導内容を考えているのかを自由記述にて回答を得た。

アンケート調査の回答は「そう思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の4件法にて評価してもらった。また、模擬授業前後の幼稚園教育要領領域「表現」の理解度の差および「現時点で幼児に自信をもって指導できるか」の意識の差の検討には、アンケートの回答を「そう思う」4点、「まあまあ思う」3点、「あまり思わない」2点、「まったく思わない」1点と点数化し、対応のあるT検定を用いて分析した。統計学的有意水準は5%未満とした。

### (3) 倫理的配慮

調査は無記名で行い、調査実施時に、調査目的、

利用方法、回答は強制でないことを学生に説明し、参加・不参加は自由であること、不参加であっても成績などへの影響はないことを説明した。その後、質問紙を配布し、研究に同意した者のみ、授業後、教室外に設置した回収箱に提出してもらった。

## 3. 結 果

調査票は124部配布し、回収数は124部（回収率100%）であり、有効回答数は97部（78.2%）であった。

### (1) 幼稚園教育要領「表現」における理解度の変化

模擬授業実施前後に行った幼稚園教育要領領域「表現」についてのアンケート調査を、模擬授業実施前と実施後で質問項目ごとに比較した。その結果、すべての質問項目において実施後の理解度が有意に高い（ $p<0.001$ ）結果を示した（表1）。各質問項目の自由記述は下記の通り。

#### (i) 領域「表現」のねらい及び内容の理解

「1. 領域「表現」のねらい、内容を理解していますか」の質問項目において、なぜそう回答したのか「その理由」を調査した結果、実施前においては「授業で学んだが、はっきりと覚えていない」、「まだ理解しきれていない」、「何となく理解はしているが説明はできない」、「わからない」等の意見が多くあった。その中でも数人は「授業を通して学んできた」と領域「表現」のねらい、内容を理解していると答えた学生も数名いた。

実施後においては「今回の幼稚園教育法の授業を通して理解できた」、「授業を通して表現して伝えることの大切さを理解することができた」、「模擬授業を経験して、なんとなく理解できていると感じる」、「指導案を考えるうえで参考にしたから」等の回答が多くあった。また、「具体的にはまだ理解しきれていない」、「説明はできない」、「まだ完璧に理解できたわけではない」との意見もあった。

#### (ii) 「豊かな感性」を持たせるための工夫

「2. 子どもたちに豊かな感性を持たせるための工夫を考えていますか」の質問項目において、どのような工夫を考えているのか調査した結果、実施前に

表1 幼稚園教育要領理解度における各アンケート項目の検定結果

質問項目	実施前(n=97)	実施後(n=97)	t値
	mean±SD	mean±SD	
1. 領域「表現」のねらい、内容を理解していますか	2.03 ± 0.55	2.54 ± 0.61	-6.18 ***
2. 子どもたちに豊かな感性を持たせるための工夫を考えていますか	2.36 ± 0.65	3.08 ± 0.49	-9.52 ***
3. 子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現し、楽しめるような工夫を考えていますか	2.35 ± 0.66	3.01 ± 0.55	-8.53 ***
4. 生活の中でイメージを豊かにしていくことがねらいとなっていることを理解していますか	2.13 ± 0.75	2.78 ± 0.58	-7.60 ***
5. さまざまな表現を楽しむことを日頃意識していますか	2.34 ± 0.71	2.86 ± 0.78	-6.41 ***
6. 生活の中で様々な動きや音、色、形などに気づき、楽しむ内容を考えていますか	2.27 ± 0.67	2.79 ± 0.69	-6.24 ***
7. 感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現する内容を思いつきますか	2.22 ± 0.73	2.91 ± 0.71	-7.71 ***
8. 子どもたちのイメージを、動きや言葉などで表現させる工夫を考えていますか	2.08 ± 0.73	2.80 ± 0.67	-8.24 ***
9. 子どもたちのイメージを、演じて遊んだりする内容を考えていますか	2.10 ± 0.71	2.72 ± 0.75	-6.99 ***

\*\*\* : p<0.001

においては「そこまで考えられていない」、「具体的にはわからない」の意見が過半数をしめていたが、その他にも「子どもの発想を否定（制限）せず、子どもの感性を大切に柔軟に対応する」、「自然とかわる」、「様々な色、音、形に触れる機会を多く持つ」等の意見があった。

実施後においては「子どもたちに「それいいね」と共感し、「こうしたらどうか？」など声をかけて子どもの発想をさらに広げる」、「保育者が提示するのではなく、子どもが自ら考えて行動できるように材料などを準備しておく」、「様々な自然に触れたり、見たりなどして感性を磨くような環境設定をする」、「遊んだことを言葉や絵で表現する」、「見たものの、感じたことをリズムに合わせて自由に表現する」、「想像力などを育てるように、何かになりきる

遊びをする」等があげられた。

### (iii) 子どもたちが表現を楽しめる工夫

「3. 子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現し、楽しめるような工夫を考えていますか」の質問項目において、どのような工夫を考えているのか調査した結果、実施前においては「そこまで考えられていない」という意見が過半数であった。その他には「子どもたちの考えたことに共感し、楽しい雰囲気をつくる」、「子どもたちの反応をみつつ、それに合わせた関わりや声かけをする」、「体を動かす」等の意見があった。

実施後においては「子どもたちが自分なりに表現したことを受け止め、そこから遊びに発展させる」、「子どもたちが感じたことなど自由に発言（表現）



できる環境をつくる」、「保育者が指定せず、子どもの動きを制限しない」、「子どもの気づきを大切にしてみんなで共有する」等があげられた。

#### (iv) 豊かなイメージについての理解

「4. 生活の中でイメージを豊かにしていくことがねらいとなっていることを理解していますか」の質問項目において、なぜそう回答したのか「その理由」を調査した結果、実施前においては「理解していない」という意見が過半数であり、「授業を通して何となく理解しているが、詳しくは説明できない」、「ねらいを考えたことがない」という意見があげられた。

実施後においては「授業で行った「だるまさんころんだ」を通して、様々な動きやイメージを表現する活動を経験したことで理解できた」、「日常生活(体験など)でこそイメージを豊かにし、それがねらいと繋がっていると感じたから」、「生活の中でイメージを膨らませることにより、想像力が育まれ、生活がより楽しくなるから」、「子どもたちは遊びの中でたくさんのことを学んでいるから」等の意見や、「授業を通して何となくわかったけれど、生活の中でだとわからない」、「まだ理解しきれていない」等の意見もあげられた。

#### (v) 表現を楽しむことへの意識

「5. さまざまな表現を楽しむことを日頃意識していますか」の質問項目において、どのような意識をしているのか調査した結果、実施前においては「日頃意識していない」、「たまに考えるくらい」の意見が過半数であった。その他、「体を動かして表現する」、「言葉に出して表現する」、「音楽で表現する」等があげられた。

実施後においても「授業外では、あまり意識できていない」との意見が数人いたが、「周りの人の表現の仕方にもよく観察する」、「普段外を歩いているときに携帯ばかりではなく、周りの景色を見るようにしている」、「身近にあるものを観察して、何か活動に使えないか考えている」、「動きだけではなく、言葉や表情で自分の気持ちをいろんな形で表現しようと心がけている」等があげられた。

#### (vi) 生活の中での様々な気付き

「6. 生活の中で様々な動きや音、色、形などに気付き、楽しむ内容を考えていますか」の質問項目において、どのような内容を考えているのか調査した結果、実施前においては「意識していない」、「時々考えようとする」等が多くあった。その他、「気付きはするが、内容までは考えていない」、「自然と触れ合う」、「音楽を聴く」、「ただ歌うだけでなく踊ったりする」等があげられた。

実施後においては「自然と深くかかわる」が多くあげられ具体的内容として、「葉っぱや雲、鳥でも異なる形や動きをしているため見比べる」ことや、「雨の音、風の音を聞いて変化を楽しむ」、「四季を楽しむ」等があげられ、その他にも「見つけたもので何か制作ができないか考えるようにしている」、「音楽に合わせて体を動かす」、「絵を描く」、「食べ物には成長する働きだったり、食べた時の音、色もたくさんある、形も同じものなのに違ったりして野菜を例に挙げるだけでも楽しめる」等があげられた。

#### (vii) 音や動きに対する表現

「7. 感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現する内容を思いつきますか」の質問項目において、どのような内容を考えているのか調査した結果、実施前においては「わからない」の意見が一番多く、その他には「ダンス」、「楽器で強弱をつけて表現する」、「リトミックで動物など、自分の思いついたものを表現する」、「体を動かす」等があげられた。

実施後においては「ダンス(リズム体操)」、「ジェスチャーゲーム」、「動物になりきる」、「好きな楽器をつくる」、「リトミック」、「喜怒哀楽を表現する」等があげられた。

#### (viii) イメージを表現させる工夫

「8. 子どもたちのイメージを、動きや言葉などで表現させる工夫を考えていますか」の質問項目において、どのような工夫を考えているのか調査した結果、実施前においては「わからない」、「考えていない」が過半数であった。その他、「子どものイメージ通りになるような動きや言葉かけをして手助けする」、「子どもの考えをまず受け止める(制限しない)」等があげられた。

実施後においては「授業で行った「だるまさんがころんだ」の発展系（これでテーマを伝えるだけで、イメージができて表現しやすい）」、「ジェスチャーで伝える」、「音楽に合わせて自由に踊る（体で表現）」、「保育者が「どんな動き?」「どうやってやる?」などの声かけや、「こんな感じ?」と保育者が実際にやって見せる」、「動物のものまね」等があげられた。

#### (ix) イメージを通した遊びの方法

「9. 子どもたちのイメージを、演じて遊んだりする内容を考えていますか」の質問項目において、どのような内容を考えているのか調査した結果、実施前においては「考えていない」、「わからない」、「イメージできない」が多くあり、その他に「お遊戯会・発表会」、「ごっこ遊び」、「劇」等があげられた。

実施後においては、「劇（先生だけでなく、子どもも含めて一緒に内容を考える）」、「ごっこあそび」、「ジェスチャーゲーム」、「生活の中で見る人たちになりきって遊ぶ」、「動物になりきる」、「子どもたちのイメージを膨らませていき1つのお話を作る」等があげられた。

#### (2) 幼児指導への自信の変化

「現時点で幼児に自信をもって指導できるか」についてのアンケート調査を、模擬授業実施前と実施後で比較した。その結果、実施後の自信度が有意に高い（ $p<0.001$ ）結果を示した（表2）。

また、その理由を自由記述で回答を得たところ、実施前においては「自信がない」、「経験がない」、「知識や技術が足りない」、「自分が主体となって幼児に指導したことがない」、「恥ずかしい」等の意見があげられ、実施後においては「子どもに指導したことがないから少し不安」、「模擬授業があまり上手くいかなかった（説明の仕方）（時間配分）（子ども役の興味を引けなかった）」、「改善点がまだあり、臨機応変に対応するのが難しい」、「幼稚園教育要領の内容をもっと理解すべき」、「配慮などが足りていない」、「幼児の発達状況に合わせられていない」等の意見に加え、「模擬授業や実習で経験してきたから少しずつ自信がついてきた」、「いろいろな人の模擬授業を見て、自分では思いつかない活動を知ることができた」、「次の課題が分かったので少し自信がついた」等の意見もあった。

表2 幼児への指導に対する自信

質問項目	実施前(n=97)	実施後(n=97)	t値
	mean±SD	mean±SD	
現時点で幼児に自信をもって指導することはできますか	1.49 ± 0.56	2.27 ± 0.60	-10.25 ***

\*\*\*:  $p<0.001$

## 4. 考 察

#### (1) 幼稚園教育要領領域「表現」の理解度について

幼稚園教育要領領域「表現」の理解度について、模擬授業実施前と実施後で比較した結果、全ての質問項目において、実施後の理解度が有意に高い結果であった。その中で、領域「表現」のねらい、内容については、実施前において、ほとんどの学生は理解していなかった。実施後においても「説明はできない」、「まだ完璧に理解できたわけではない」との意見があり、先行研究の模擬授業実践後のあそびのねらいに対しての課題意識が低い（高橋ら, 2015）

という結果と同様な傾向が示された。しかし、実施前に比べ、「今回の幼稚園教育法の授業を通して理解できた」、「授業を通して表現して伝えることの大切さを理解することができた」、「模擬授業を経験して、なんとなく理解できていると感じる」、「指導案を考えるうえで参考にしたから」などの意見が増え、模擬授業を通して幼稚園教育要領領域「表現」について理解ができたと言いきれなくとも、学生自身がねらいや内容に対して意識を向けるようにはなっただと考えられる。自由記述にもあげられていたように、指導案作成は理解度を高める影響があったと考える。「生活の中でイメージを豊かにしていくことが

ねらいとなっていることを理解していますか」の質問に対する結果からも同様のことが言える。模擬授業を実施したことで「生活の中のイメージを豊かにしていくことが幼児教育には重要である」との気づきが多くあげられ、「ねらい」の意味を少しずつ理解する学生が増えてきたことが窺える。子どもと関わる時間が長い保育者にとって、運動あそびを含めたあそびの質と量を豊かにし、実践的指導力を身につけることが求められており、あそびを通して豊かな体験ができるように意図的・計画的に環境を構成し援助できることが必要である（高橋ら、2015）ことから、模擬授業実施前には、幼稚園教育要領のねらいや内容の理解を深めておくべきなのではないかと考える。このことにより、模擬授業のさらなる課題が見えてくる可能性がある。

また、「さまざまな表現を日頃意識しているか」についても実施前は、日頃意識していない学生が過半数であったが、実施後は「周りの人の表現の仕方もよく観察する」、「身近にあるものを観察して、何か活動に使えないか考えている」、「動きだけではなく、言葉や表情で自分の気持ちをいろんな形で表現しようと心がけている」等があげられた。表現についてあまり考えることもなかった学生が、模擬授業を経験したことで日頃の生活でも表現について意識するようになった。保育に携わる者が幼児期に必要な「表現」活動に対する理解を深めるためには、自らが様々な表現体験を重ねることや、多様な活動事例を探索し積極的に自らの実践へ取り入れていくことが必要とされている（永井、2011）。よって、普段の生活から表現に対する意識を高めていくことが重要だと言える。また、小林（2017）の報告においても、自分の体験や感じたことと、実際の保育場面を結び付け考察することが、養成の段階では重要となるとされており、模擬授業だけではなく、普段の生活の中での気づきを保育現場に生かすことが幼稚園教員養成課程の学生には求められている。

子どもたちに豊かな感性を持たせるための工夫や、子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現し楽しめる工夫、また子どもたちのイメージを動きや言葉などで表現させる工夫についても、実施前においては、「そこまで考えられていない」、「具体的にはわからない」という学生が過半数であっ

た。しかし、実施後には、「子どもたちが自分なりに表現したことを受け止め、子どもの発想をさらに広げるための声かけ」や、「保育者が提示するのではなく、子どもが自ら考えて表現できるようにすること、さらにどんなあそびをするかなど内容が具体化された。保育者は幼児の経験や発達状況を見極めた上で各々の「自分なりの表現」を受容し、自由な表現を創出できるように、適切な環境を整えなければならない（新山ら、2014）と報告されており、模擬授業を通して、その重要性に気付くことができたのではないかと推察される。

「生活の中で様々な動きや音、色、形などに気づき、楽しむ内容」や、「感じたこと、考えたことを音や動きで表現する内容」、「子どものイメージを、演じて遊んだりする内容」を考えているかの質問に対して実施前は、「体を動かす」、「自然と触れ合う」などの回答もあったが、ほとんどの学生が「わからない」、「イメージできない」という意見だった。しかし実施後には、実際に幼児に指導したい具体的な内容が記載されており、子どもの表現を引き出すような内容がより明確化されていた。

これらのことから、模擬授業は幼稚園教育要領の理解に影響を与えていることが示唆される。本研究は学生の自己評価からの理解度を判断した為、それが幼稚園教育要領の本質をとらえた理解に繋がっているかはまだ定かではない。しかし、模擬授業を通して学生自身が、幼稚園教育要領領域「表現」の内容について意識し、模擬授業を実施したことにより、表現に対する意識は模擬授業前に比べはるかに上がってきたように感じる。それは、幼稚園教育法の指導教員が幼稚園教育要領領域「表現」のねらいおよび内容を意識させた授業展開を実施したからこそ、学生自身もその内容を意識し、模擬授業後の理解度が上がったのではないかと考えられる。佐藤（2009）の研究によると、模擬授業を実施することで、ただ黙然と授業に出席するのではなく、自分なりの視点を持って授業を受けるようになるなど、自らの授業設営という目標を念頭に置きながら学生生活を送るきっかけになったと報告されており、本研究の結果からも模擬授業を経験したことで、学生自身が普段の生活から表現に対する意識を持つきっかけになったのではないかと考えられる。



これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、教育の目標及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められている（村野，2017）。身体表現のあそびの実践内容が子どもたちの感性豊かに感じる心を育て、自分の思いや考えをそれぞれ自由に表現できる身体表現あそびであるかについて、保育者はその内容について、十分な検討と吟味が必要である。しかし、身体表現あそびは、子どもたちが興味を持ったものを自由に身体で表現するあそびであり、一人でも二人でもでき、そこには決まった形や方法はない（多胡，2008）。決まった形や方法の正解がないからこそ、幼児の発達や学びの過程を理解した上で授業内容を考えていかなければならない。そのことから、幼稚園教育要領の理解は必須となってくる。

これまでの研究においても、限られた保育者養成のカリキュラムの中で「何をどのように教えるか」という内容と方法の精査を行う研究が必要とされている（新山ら，2014）。今後、幼稚園教育要領をどの程度理解させて模擬授業の実践をするかは今後の課題である。

## (2) 幼児指導への自信について

「現時点で幼児に自信をもって指導できるか」について、模擬授業実施前と実施後で比較した結果、実施後の自信度が有意に高い結果となった。

実施前においては、経験や知識が足りず自らの模擬授業に自信がない学生が多く、実施後においても「模擬授業があまり上手いかなかった」ことや、「実際に子どもに指導したことがないから不安である」という自身の模擬授業に自信がないという意見があげられた。佐藤（2018）による実践的指導力向上からみた授業効果の検証においても、模擬授業を通して、活動を“子どもの前でやってみることはできる”感じはする、感触は掴んだ、というレベルにとどまっており、自信をもって指導できるレベルには到達できていないことが明らかとされており、有意義に学

習はできたと感じるものの、十分に指導力が身につき、子どもの運動・表現活動に自信が持てる程には至らなかったことが報告されている。幼稚園教員養成課程の学生において、指導の経験がないまま現場実習に臨むのは無理があり、学外実習など実践現場で指導を行う前に、学生を幼児に見立てて模擬授業（指導実践）を実施し、事前の段階的な指導実践を行うことが必要不可欠になってくる。模擬授業は、指導者役としてどのような指導内容で実施するかも重要視されるべき点ではあるが、幼児役となった学生が、「幼児を十分理解してなりきる」ことも重要である。「幼児になりきる」ためには、幼児を十分理解することが必要であり、幼児を十分理解することで、「予想される幼児の姿」を描くことができる（高原ら，2014）。そのためにも幼稚園教育要領および幼児の発達段階を理解し、普段から幼児の行動をよく観察して、それを模擬授業に生かしていくなどの工夫が必要となってくる。確かに模擬授業は、実際に幼児に指導するわけではない為、不安な気持ちが残ることは大いに考えられるが、その中でも幼児役を経験することでの気付きもあり、指導上の援助や配慮、留意点へとつながることができる。よって、学生自身が普段から幼児に意識を向け、幼児の姿を把握することの必要性が求められてくる。指導者役の学生はもちろん、幼児役の学生においても、模擬授業のふりかえりは、学生自身が指導における重要課題に気づくきっかけをつくり、その後の幼児指導につなげる手がかりとなる（高原ら，2014）。そのことから、自身の模擬授業だけではなく、他の学生の模擬授業も幼児役として経験を重ねることが重要であり、それが幼児指導への自信に繋がっていくのではないかと考えられる。そのため、模擬授業実施前に幼児役として模擬授業に参加することの意義についても幼稚園教員養成課程の学生に指導していくことが求められるのではないかと考える。

自信が持てない理由として、「幼稚園教育要領の内容をもっと理解すべき」、「幼児の発達状況に合わせられていない」等の意見もあり、幼稚園教育要領の理解へ意識が向けられてきた。「自ら学び、生きる力」を身につける子どもを育てることが重視されている現在、その資質を自らが具えた教員を育成することこそが、教員養成課程における重要な課題と



言われている（佐藤，2009）。また、菅家ら（2018）の報告によると、幼稚園教育法（身体表現）の授業においては、幼児教育で求められる指導内容にしていくためにも各領域のねらいおよび内容の理解について理解度を上げていくことが重要であり、自信を持って指導できる学生を増やしていくためには、実践内容だけではなく、幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本などの理解度をあげていくことが重要であると述べられている。ゆえに、幼稚園教育要領を理解させたうえで模擬授業や実習の経験を積んでいくことで、模擬授業の更なる効果を期待できる。

また、「模擬授業や実習で経験することで自信がついてきた」という学生や、「いろいろな人の模擬授業を見て、自分では思いつかない活動を知ることができ、次の課題が分かったので少し自信がついた」等の前向きな意見もあった。梅垣ら（2006）の研究からも、学生たちの自信を改善するためには、模擬授業と反省・改善のための学習を何度も繰り返し経験させることが必要であることが述べられている。その中で、専門的知識と指導力を身につけた実践力のある教員を養成するためには、幼児の発達に即して、幼児教育において育みたい資質能力、そして幼児の発達発達を理解させていく必要がある。

これらのことから、学生の幼稚園教育要領の理解度を上げるための指導内容においては、今後も検討していかなければならない。15回の授業回数の中で、いかにして幼稚園教育要領を理解した上で模擬授業を実践し、限られた模擬授業の実施回数の中で、指導者役、幼児役を経験しながら、幼児指導に対する自信を付けていくことができるように学生を養成していけるかが教員養成校には重要な課題となっている。

## 5. まとめ

幼稚園教員免許取得希望者を対象に、幼稚園教育要領領域「表現」の内容の理解度および幼児に指導できるかの自信度を、模擬授業実施前後の自己評価から比較検討した。

その結果、全ての質問項目に有意差が認められ、模擬授業の実践は、学生の幼稚園教育要領の理解度に与える影響があることが示唆された。このことか

ら、模擬授業実施前に幼稚園教育要領の内容理解を深めることで、今後の課題が明確化される可能性がある。

さらに、幼稚園教育要領および幼児の発達段階を十分理解した上で幼児役として模擬授業に参加することで、指導上の援助や配慮、留意点へとつながることができる可能性が示唆された。ゆえに、幼児役としての模擬授業参加の意義を学生に指導することで、更なる模擬授業の効果が期待できる。

また、今後の幼稚園教育法（身体表現）の授業内容の課題として、模擬授業実施前に幼稚園教育要領領域「表現」の内容を学生に修得させ、幼児の発達や学びの過程を理解した上で授業内容を考えることで、模擬授業の効果をさらに上げる可能性があるといえる。そのためには、幼稚園教育要領の理解をさせた上で模擬授業を展開できるように、授業内容の改善をしていかなければならない。

## 《参考文献》

- 阿部アサミ（2016）「保育者養成校における実習に関する研究－模擬保育の意義に着目して－」、『白鷗大学教育学部論集』，Vol.10, pp.263-276.
- 池田裕恵（2015）「幼児期の育ちと運動遊び指導の意義および課題」、『子どもと発達発達』，Vol.13, no.1, pp.11.
- 菅家沙由梨・浅井泰詞・雪吹誠（2018）「幼稚園教員養成課程の学生における身体表現指導の理解度について」、『目白大学高等教育研究』，Vol.24, pp.41-48.
- 清葉子（2013）「模擬授業演習（幼稚園）の立案とその教育効果」、『相山女学園大学教育学部紀要』，Vol.6, pp.335-353.
- 小林美花（2017）「表現力豊かな保育者養成を目指した授業の研究－科目「身体表現」における授業実践－」、『北翔大学短期大学部研究紀要』，Vol.55, pp.49-54.
- 松山由美子（2010）「保育者養成における「保育実践力」育成のための学びの場－模擬保育と学外実習に関する質問紙調査の結果からの考察－」、『四天王寺大学紀要』，Vol.49, pp.197-212.
- 文部科学省（2008）「幼稚園教育要領」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/)

youryou/you/ (2018/10/16)  
文部科学省(2017)「教職課程コアカリキュラム(案)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/\\_icsFiles/afielddfile/2017/07/20/1387656\\_08.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afielddfile/2017/07/20/1387656_08.pdf) (2018/10/17)  
村野芳雄(2017)『平成29年告示幼稚園教育要領  
保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・  
保育要領<原本>』,株式会社チャイルド本社,p5.  
永井夕起子(2011)「幼児の表現活動に関する事例  
報告」,『奈良女子大学スポーツ科学研究』,Vol.13,  
pp.57-62.  
新山順子・高橋敏之(2014)「保育者養成における  
身体表現教育に関する研究の動向と課題」,『兵庫  
教育大学 教育実践学論集』,Vol.15, pp.79-87.  
岡田正章・千羽喜代子他編(1997)「現代保育用語  
辞典」,『フレーベル館』,p.432.  
佐藤仁美(2009)「小学校教員養成課程における授  
業づくりの学び-模擬授業を通して-」,『表現文  
化研究』, Vol.8, pp.99-112.  
佐藤由美(2018)「幼小教職必修「身体表現(体育)A・  
B」の授業内容の検討と学生の到達度評価、実践

的指導力向上からみた授業効果の検証」,『大阪樟  
蔭女子大学研究紀要』, Vol.8, pp.75-86.  
多胡綾花(2008)「保育者の「身体表現あそび」に  
ついての意識調査」,『湘北紀要』, Vol.29, pp.43-  
54.  
高橋人美・佐々木晴美(2015)「遊びに関する一考  
察-集団あそび模擬授業を通しての学生自己評価  
と教員評価-」,『聖徳大学幼児教育専門学校研究  
紀要』, Vol.7, pp.23-29.  
高原和子・小川鮎子・瀧信子・矢野咲子・下釜綾子  
(2014)「幼児の身体表現指導における指導実践後  
のふりかえりの有効性」,『福岡女学院大学紀要・人  
間関係学部編』, Vol.15, pp.89-95.  
高原和子・瀧信子・矢野咲子・怡土ゆき絵・青木理  
子・小川鮎子・小松恵理子(2017)「保育者養成  
における身体を使った表現(身体表現)指導の実  
態」,『福岡女学院大学紀要』, Vol.18, pp.71-75.  
梅垣明美・晴山紫恵子(2006)「体育における保育  
者養成プログラムの検討」,『浅井学園大学短期大  
学部研究紀要』, Vol.44, pp.55-64.  
(受付日:2018年10月31日、受理日2018年12月20日)